息長古墳群（おきながこふんぐん） *近江町*

北接する長浜市域から南北に細長く伸びる横山丘陵は、西方の琵琶湖との間に長浜平野を区切り、長浜市・近江町・米原町域に多くの遺跡群を所在させています。この丘陵の南端部から、南接する天野川右岸の間に所在する中後期古墳群が「息長古墳群」です。古墳群の中心となるのは、6世紀前葉の前方後円墳「塚の越古墳」「狐塚5号墳」「山津照神社古墳」です。

塚の越古墳は、既に覆土の大半を消失していますが、1989年の発掘調査によって、葺石と周濠を持ち、石見型盾埴輪を巡らせ、墳頂部に家型埴輪・鶏型埴輪・馬型埴輪・人物埴輪等を配置していた事が明らかになりました。狐塚5号墳は、1985年の発掘で明らかになった帆立貝形古墳で、豊富な器材埴輪（家型・盾型・ゆぎ型・鶏型・太刀型・人物埴輪）が出土しています。山津照神社古墳は、明治15（1882）年に石室が開かれ、家型石棺が発見された他、冠帽・鏡・馬具・三輪玉等の遺物が出土しました。このほか、丘陵の頂部から裾部にかけて、先行する中期古墳「甲塚古墳」「定納古墳」「顔戸山砦1号墳」「日撫山古墳」「後別当古墳」の測量調査も近年盛んに実施され始め、息長古墳群の全貌が次第に明らかになりつつあります。（宮崎幹也）

狐塚.5号墳から出土した器財埴輪（近江町 息長古墳群）

情報BOX

伊吹町教育委員会では下記の報告書が刊行されました。

『内座遺跡発掘調査報告書』（伊吹町文化財調査報告書9集）

姉川上流上板並における室町時代の水田跡と縄文土器などが出土。

文化財パンフレット「夢発信息吹」

伊吹町内の史跡や文化財、見どころを紹介しています。

◆問い合わせ先
伊吹町教育委員会生涯学習課
0749（58）1121

近江町教育委員会では下記の報告書が刊行されました。

『近江町埋蔵文化財調査集報1』

平成2年度から6年度までの国庫補助事業の発掘調査の成果を収録しています。

◆問い合わせ先
近江町教育委員会社会教育課
0749（52）3111

野洲町銅鐸博物館では春期企画展「滋賀の石器時代」（4／29－5／31）が開催されます。米原町磯山城遺跡より出土した縄文時代早期の土器や石器が展示されます。

◆◆編集後記◆◆

「佐加太」創刊号をお届けします。いかがでしたでしょうか。御意見、御感想をお聞かせ下さい。これからも坂田郡内の文化財について広く紹介していくつもりです。御期待下さい。

さて本誌は創刊号ということで郡民の皆様には全戸配布させて頂きました。次号からは米原町中央公民館、近江町中央公民館、山東町中央公民館、伊吹薬草の里文化センターに配備しておきますので、是非御講読下さい。

なお本誌は年2回発行の予定で、平成7年度は5月下旬と10月下旬頃に発行します。

坂田郡文化財ニュース
佐　加　太　創刊号
発　行　平成7年3月31日
編　集　坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局　〒521滋賀県坂田郡米原町下多良3－3
米原町教育委員会社会教育課
0749（52）1551
印　刷　㈱ 立木印刷

創刊号
1995年3月31日
滋賀県坂田郡社会教育研究会
文化財部会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

創刊にあたって

坂田郡社会教育研究会
文化財部会

近江の最高峰、伊吹山の南西麓に広がる扇状地と、天野川流域の肥沃な平野からなる滋賀県坂田郡は、地理的に県の東北部に位置しており、古くより近畿、東海、北陸地方の接点として、東西文化交流に重要な位置を占めてきました。

昭和40年代よりはじめられました、ほ場整備事業に伴い、坂田郡内でも遺跡の発掘調査が実施されることとなりました。こうした調査によって検出された遺跡のなかには、近江の原始、古代史を塗り変えたものも少なくなく、さらには坂田郡が県内において有数の遺跡が所在する地域であることも再認識されました。

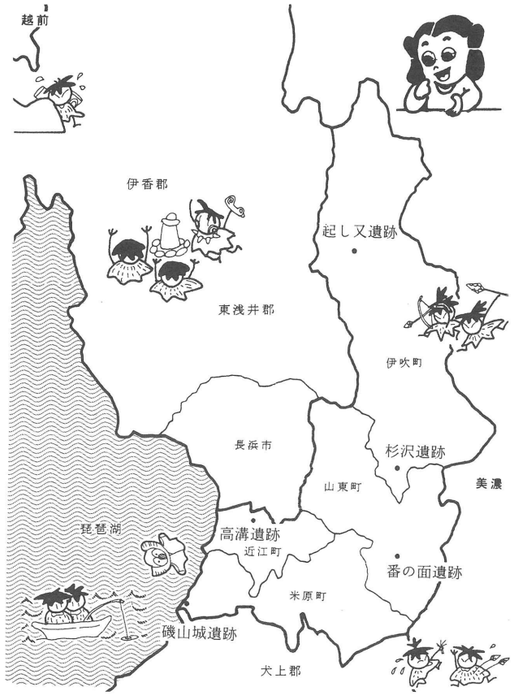
こうした埋蔵文化財の調査、保護について坂田郡内に所在する米原、近江、山東、伊吹の各町では、昭和50年代の後半より文化財専門職員を採用し、円滑に進めてまいりました。また昭和62年には、郡内において情報を交換し、今後の調査をよりよいものにするために、坂田郡社会教育研究会のなかで文化財研究会を組織しました。この会は平成元年より、坂田郡社会教育研究会文化財部会となり現在に至っております。

文化財部会では遺跡の発掘調査の成果をどのように町民や県民の方々に知っていただくかという啓発活動にも力を入れてきました。残念ながら郡内には博物館や資料館施設がないため、平成3年には滋賀県立文化産業交流会館で「甦る坂田の古代展」を開催し、以後毎年各町の公民館で巡回展をおこなってまいりました。そしてその総決算として、平成6年には滋賀県立安土城考古博物館と共催で、同博物館で「古代文化の交差点」を開催することができました。

また研究者の方を対象とした研究会にも取り組み、平成6年には庄内式土器研究会と共催で第13回庄内式土器研究会「近江系土器の実態とその移動」を開催し、県内外から多くの研究者が参加されました。

今後は郡民の皆様はもとより、県内外の皆様に広く坂田郡の文化財を紹介していく目的で、部会誌「佐加太」を年2回発行することとなりました。

限られた紙面ではありますが、坂田郡の文化財情報誌として号を重ねていく所存です。どうぞ御期待下さい。



坂田郡の遺跡案内　*縄文時代編*

伊吹山系と霊仙山系を背後にひかえ山の幸が、琵琶湖を眼下に見おろし湖の幸が豊富な土地です。こうした環境は狩猟採集社会であった縄文人たちにとって、願ってもない土地だったことでしょう。そうした縄文人達の足跡が坂田郡内には数多く残されています。

磯山城遺跡は早期の代表的な遺跡で、押型文土器という県内では最も古い土器の一群が出土しています。また早期末葉の屈葬人骨も検出されています。

高溝遺跡も同じく早期の遺跡で、やはり押型文土器が出土しています。早期の遺跡がいずれも、湖岸に近い低地から発見されたことは注目されます。

番の面遺跡は中期の遺跡で、竪穴住居跡が検出されています。出土した土器は中期後半の指標土器として著名で、番の面式と命名されています。

杉沢遺跡は昭和13年京大の小林行雄氏が発掘調査された著名な遺跡で、晩期の合口甕棺が多く出土しています。また起し又遺跡からは美濃地方や信州との交易を示す土器が出土しています。

松尾寺遺跡出土の銅椀について　*米原町*

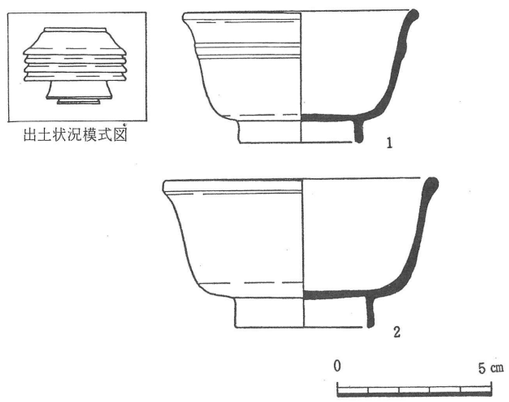
米原町内の国道21号線を走っていると丹生川という川に遭遇します。そこから上流に向って約５㎞程入った山中に、松尾寺遺跡と呼ばれる山岳寺院跡が遺されています。この寺院跡の創建は伝承では古くは奈良時代までさかのぼると言われていますが、それを裏付ける資料が乏しく、その実態は不明瞭なものでした。

ところが数年前より、米原町教育委員会が松尾寺遺跡の保存・整備を目的とした実態調査に乗り出したことにより、少しずつではありますがその実態が明らかになりつつあります。

その方法の一つとして考古学的手法による発掘調査を継続的に毎年行っています。これまで科学的な調査のメスが入ったことがなかったこともあり、毎年新たな発見の連続です。今回はそんな数ある成果の中から最新の情報をお届けします。

平成６年10月のある日、江戸時代再建の本堂跡基壇中央部を発掘調査していると、大小２個の銅椀とその上に瀬戸美濃産の陶器の皿４枚を重ねて置いたものが発見されました。出土場所や状況から、本堂建立の際に行われた地鎮に使用されたものと考えられます。銅椀の中には五穀と呼ばれる穀物の籾殻や種子が認められました。

山岳寺院におけるこのような地鎮具の検出例は滋賀県内でもほとんど例がなく、天台密教系寺院の地鎮作法の一端が伺える貴重な資料と言えるでしょう。（土井一行）



観音寺遺跡の調査概要　*山東町*

観音寺遺跡は、山東町の北西端、横山丘陵の麓に位置しており、中世より栄々と営まれている観音寺境内一帯が遺跡として周知されています。

平成５年に本堂、鐘楼、惣門が重要文化財に指定されたことを期に、本遺跡の様々な資料を得るため、平成５年度から調査を実施しています。

平成５年度は、遺跡の測量を行い、昨年度は11月から12月にかけて坊跡の一部を発掘調査しました。

その結果、生活の跡はそのほとんどが調査区域の西側で見つかりました。南西端では、建物の礎石が確認され、西側と南側では面を揃えています。礎石間は、東西約１．３ｍ・南北約１．２ｍを測りました。

礎石の北側ではこぶし程度またはそれ以上の石が多数見つかりました。一見無造作に投棄されたようにも見えますが、石の間から甕片が数点見つかっていることから、埋甕が位置していたのではないかと考えています。

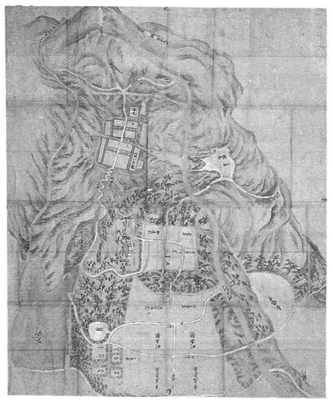
遺物としては、江戸時代後半頃の瀬戸美濃の灰釉皿及び壷・鉄紬天目茶碗及びすり鉢、青磁、灯明皿、越前の甕・壷などが出土しました。

今回の調査ではわずかな面積の調査であり、遺構の性格も不詳なものが多く、坊跡の性格を解明するまでには至らなかったが、今後も、古文書調査と合わせながら全容が解明できればと考えています。（桂田峰男）

伊吹山麓の戦国城下町 ―『上平寺城絵図』を読む―　*伊吹町*

伊吹山麓の上平寺に、湖北で最初の「都市」ともいえる、広大な館と城下町跡がのこっていることは、意外に知られていません。

上平寺館の主は京極氏で、15代高清が築城したといわれています。鎌倉時代に初代氏信が愛知川以北６郡を分け与えられて、伊吹山腹の太平寺や柏原を本拠地としました。応仁の乱の頃に、11代持清に近江一国の守護職が与えられましたが、以後、盛衰を繰り返しながら、四国丸亀藩主、丹後宮津藩主など幕末まで続いた大名家です。

伊吹町所蔵の『上平寺城絵図』は、江戸時代の初め頃のもので、伊吹山腹の山城と山麓の居館、城下町が描かれています。山城は現在でも本丸・二の丸や土塁・堀切が良好にのこっていて、中世の雰囲気を感じることができます。現状は、絵図の山城の部分とほぼ一致しています。また、京極氏や重臣たちの居館跡も、絵図のままの構造を現地で見ることができます。このことから、この絵図の信頼度はかなり高いと考えられ、絵図の城下町部分も、当時の様子をあらわしているものと思われます。

上平寺城は、浅井氏の小谷城や羽柴氏の長浜城より古く、規模的にも大きい遺跡です。現在は広域農道が通り、今後の開発も予想されることから、早急な確認調査が必要です。調査によって山城・居館・城下町がセットになった、湖北で最も古い「都市」が、われわれの前にその姿をあらわすものと考えられます。（高橋順之）